

人称代名詞における複数を表す接尾辞「ら」「たち」の 使い分けについて

—BCCWJ による調査から—

藤本 珠笛

【キーワード】

人称代名詞、複数、接尾辞、「～ら」、「～たち」、心的距離

【要旨】

本稿は、複数形接尾辞「ら」「たち」の使い分けについて、コーパスを用いて使用実態の調査を行い、人称代名詞を中心にその特徴を考察するものである。調査の結果、「ら」においては三人称代名詞「彼」との共起が多く、排他性や客観性、謙譲の意などを示す性質がみられた。一方、「たち」では一人称代名詞「私」と多く共起し、同質性や親しみ表現などの特徴が挙げられた。これらのことから、「ら」「たち」の使い分けにおいて、話者と指示対象における心的距離との関連性を明らかにした。また、「彼たち」を用いにくい要因として、人称代名詞「彼」が指示代名詞から転用されたものであることを挙げ、考察を行った。以上を踏まえ、日本語学習者への指導に関して提案を行った。

1. はじめに

日本語の人称代名詞において複数を表す場合は、複数形接尾辞を後接することで表現することができる。このとき、「彼ら」「私たち」「あなたがた」「私ども」のように後接する複数形接尾辞は「ら」「たち」「がた」「ども」の4つであるが、日本語母語話者は表1のように状況に応じて人称代名詞ごとに、この4つの接尾辞を使い分けている。

表1 人称代名詞における複数形接尾辞の選択例

人称代名詞	わたし	ぼく	あなた	かれ	かのじょ
ら	△	○		○	○
たち	○	○	○		○
がた			○		
ども	○				

その中でも「ら」と「たち」は人称代名詞に接続して複数を示す場合、比較的中立でどちらも使用できるものが複数存在する。一方で、「彼」「彼女」といった対応する人称

代名詞において「彼たち」は用いにくいといった複雑な部分があり、これらの使い分けは日本語学習者にとって難しい点であると考ええる。本稿では、この4つの複数形接尾辞のうち、「ら」と「たち」の使い分けに着目し、人称代名詞において複数を表す場合にどのような条件のもとで使い分けられているのかを明らかにすることとする。

2. 先行研究

『日本国語大辞典』による記述では、接尾辞「ら」について「主として人を表わす語また指示代名詞に付いて、複数であること、その他にも同類があることを示す」とし、接尾辞「たち」については「人を表わす名詞・代名詞に付いて、複数を表わす」というように、「ら」も「たち」も複数の意を示すことが定義されている。また、「ら」は「謙遜また蔑視の意を表わす」としたうえで、「たち」は「「ども」「ら」に比べて敬意が強い」と述べており、両者について敬意による違いの記述がみられるが、明確な違いが示されているとは言い難い点がある。

複数形接尾辞「ら」「たち」に関する先行研究は、森田（1989）や佐竹（1999）などが挙げられる。森田（1989）は両者の待遇差について述べており、佐竹（1999）では「ら」が事実を客観的に伝える場面で使用されることを提示したうえで「たち」との置き換えの問題について述べている。また、鄭（2001）は一人称・二人称代名詞における「ら」「たち」の選択条件について地域差、性差、聞き手包含・非包含の観点から分析を行い、鄭（2013）では『対談放送マルチメディアコーパス』を用いて、主に一人称代名詞での使い分けについて分析した。さらに、朴（2014）は人称代名詞・普通名詞・固有名詞において分析を行い、「ら」と「たち」の使い分けにおいてグループに対する認識の違いを指摘している。

これらの先行研究において、人称代名詞を中心とした複数形接尾辞に関する研究はまだ少なく、考察の余地があるといえる。また、一人称・二人称代名詞を中心に考察しており、三人称代名詞についての分析が十分ではないことが挙げられる。

したがって、本研究ではコーパスによる包括的な調査により、三人称代名詞を含めた分析を行うこととする。また、これらの接尾辞は人称代名詞に限らず、「母たち」「容疑者ら」のように名詞に接続して複数を表すため、人称代名詞以外の語についても扱うことで複数形接尾辞「ら」「たち」の使い分けを明らかにする。それらを踏まえたうえで、日本語学習者への指導について提案する。

3. 調査方法

本研究では、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）中納言版を用いて用例の収集を行った。このコーパスを用いたのは、約1億語の膨大なデータ量を誇るコーパスであり、多様なジャンルから用例が集められていることから、包括的な調査が可能であるためである。短単位検索で「語彙素：等」「語彙素：達」をそれぞれキーの条件として入力し、すべてのレジスターと年代で検索した。その結果、

「語彙素：等」で 168,432 件、「語彙素：達」では 121,337 件の用例が得られた¹。これらの用例から複数の意を示す「ら」「たち」のみを調査対象²とし、対象となった用例から Excel のランダム関数機能を用いて無作為に 2,000 件ずつ抽出し、分析対象とした。

4. 調査結果

4-1 前接する人称代名詞別にみた「ら」

表 2 は、複数形接尾辞「ら」における人称代名詞別出現数を表したものである。

表 2 「ら」における人称代名詞別出現数

一人称代名詞	件数	二人称代名詞	件数	三人称代名詞	件数
ぼく	53	おまえ（へ）	17	かれ	538
われ	51	きみ	8	やつ	18
わし	16	あんた	4	あいつ	16
わたし	5	きさま	2	こいつ	10
おれ	4	そなた	2	かのじょ	7
うち	2	てめえ	2	そいつ	3
あたし	1	なんじ	2	こやつ	1
おのれ	1	おたく	1	三人称合計	593
一人称合計	133	おのし	1	全合計	767
		おめえ	1		
		そのほう	1		
		二人称合計	41		

これを見ると、全体の 7 割の用例が三人称代名詞「かれ」と共起しており、他の人称代名詞に比べて著しく高いことがわかる。続いて、一人称代名詞の「ぼく」「われ」と共起する用例が多くみられた。また、人称に関わらず「おれ」「おまえ」「あいつ」などくだけた表現の人称代名詞と共起する傾向が読みとれる。一方で、「われ」「おたく」などの畏まった表現の人称代名詞との共起もみられる。用例を見てみると、「ら」が軽視や蔑視、排他性のある表現として用いられていることがわかる。

- (1) 当時の中国人は背の低い日本人を見て、「お前らは何者だ？」と問いかけたとき、「やまと」という答えが返ってきたため、それならこの漢字をあげようと「倭（チビ）」という文字をくれたのである。

（図書館・書籍，LBn2_00020，12950）

¹ 今回の調査では、BCCWJ での検索性数が「語彙素：等」「語彙素：達」とともに 10 万件以上を超えていたため、2 回に分けて検索し収集を行った。

² 読み方の異なる用例（例：等（トウ）、達（タツ）など）や、方言などの用法が異なる用例（たちが悪いなど）は調査対象外とした。また、複数を表す形式として「我々」「人々」などの畳語も挙げられるが、本研究では調査対象外とする。

(1) は日本人という未知の人物を警戒して発したセリフであり、異なる見た目の人種に対する排他性が認められる。また、次のような用例から軽視や蔑視、排他性だけでなく、客観性という特徴も併せもっていることが読みとれる。(2) では、小説における状況描写の文で、語り手が客観的視点から状況を説明する場面で「ら」が使用されている。

- (2) 暗くなりかけていた。一人のアラブ人が手に長い銃を持って僕らの方へやってきた。
(出版・書籍, PB39_00245, 52600)

4-2 前接する人称代名詞別にみた「たち」

表3は接尾辞「たち」における人称代名詞別出現数をまとめたものである。表を見ると、まず「たち」と共起した人称代名詞の語数が「ら」と共起した人称代名詞の語数に比べて少ないことが読みとれる。一人称代名詞での使用が多く、その中でも「私」との共起が非常に多いことがわかる。また、「おれ」「おまえ」などのくだけた表現もみられるが、「ら」のときほど多くはなかった。

表3 「たち」における人称代名詞別出現数

一人称代名詞	件数	二人称代名詞	件数	三人称代名詞	件数
わたし	357	きみ	12	かのじょ	14
おれ	39	おまえ	12	三人称合計	14
ぼく	35	あなた	8	全合計	498
あたし	10	あんた	6		
わたくし	4	二人称合計	38		
おいら	1				
一人称合計	446				

用例をみると、(3) の文では「わたしたち」がすべての人類を指す総称として用いられており、話者と指示対象との間で共通性がみられる。したがって、この場合の「たち」は同質性を表すものと位置づけられる。

- (3) 社会の情報化がすすむなかで、わたしたちの身のまわりにはいろいろな情報が氾濫している。
(特定目的・教科書, OT83_00008, 1170)

さらに、「たち」には親しみを表す性質もみられた。(4) では、指示対象である「彼女達」を「天使のような存在」と称し、話者が好感を持つ様子が感じられる。

- (4) 小汚い街並みとは似つかわしくない、見ようによつては天使のような存在の彼女達に、男はそそくさと言った。「煙草、二箱くれない？」
(出版・書籍, PB36_00150, 36410)

4-3 人称代名詞における「ら」「たち」の比較

表4は「ら」と「たち」における人称代名詞別出現数を比較したものである。

表4 「ら」「たち」の人称代名詞別出現数による比較

一人称代名詞	ら	たち	二人称代名詞	ら	たち	三人称代名詞	ら	たち
ぼく	53	35	おまえ（へ）	17	12	かれ	538	0
われ	51	0	きみ	8	12	やつ	18	0
わし	16	0	あんた	4	6	あいつ	16	0
わたし	5	357	きさま	2	0	こいつ	10	0
おれ	4	39	そなた	2	0	かのじょ	7	14
うち	2	0	なんじ	2	0	そいつ	3	0
あたし	1	10	てめえ	2	0	こやつ	1	0
おのれ	1	0	おたく	1	0	三人称合計	593	14
わたくし	0	4	おのし	1	0	全合計	767	498
おいら	0	1	おめえ	1	0			
一人称合計	133	446	そのほう	1	0			
			あなた	0	0			
			二人称合計	41	38			

「われ」や「かれ」などは「ら」の用例しかみられなかった。一方で、用例数は少ないが「わたくし」「あなた」などは「たち」でしか用例が現れなかった。また、「わたし」「おれ」「かのじょ」などは「ら」「たち」双方に用例がみられたが、「たち」での使用が優勢な傾向がみられる。したがって、それぞれの人称代名詞において「ら」と「たち」の使用は二極化の傾向にあると考えられる。ただ、「ぼく」「おまえ」「きみ」などは「ら」と「たち」の用例数にあまり差がみられず、どちらでもよく使用されていると考えられる。次の用例では、どちらでも使用されている人称代名詞において比較する。

(5) は、上司と部下における会話の用例であるが、ここでは、上司が「ついて来たまえ」といった命令的な口調で話している場面において「ら」が用いられており、立場が下である部下を軽視する表現として使用されていることがわかる。(6) も同様に上司から部下に対する発話の場面であるが、(5) のぞんざいな印象に対して、(6) では「鎮魂してやってもらいたい」と懇願する場面で「たち」が用いられており、指示対象に対する配慮が感じられる。

- (5) 「あいつは、新参者のくせに、きみたちに楯突いたりして、生意気だそうじゃないか。この際、課長の私がバシッと言ってやるから、きみらもついて来たまえ」

「しかし、もう遅いですから」

「遅い？いま何時かね、まだ十時にもなってないじゃないか」

(図書館・書籍, LBk9_00192, 2460)

- (6) 「もしわれわれが向こうに戻ったときには、ここの海底に沈んでいる将兵たちはわれわれに置いていかれることになる。それではかれらが可哀想だ。きみたちの力でできるだけ鎮魂してやってもらいたい」いかにも部下思いらしい山本の言葉である。 (図書館・書籍, LBs9_00175, 15160)

したがって、「たち」において親しみの表現と類似して配慮や思いやりの意が生まれていると考えられる。このように、上司と部下という社会的立場が異なる同様の場面において、「ら」と「たち」のどちらを用いるかによって受け取る印象が変わってくるのがわかる³。

4-4 人称代名詞以外の前接語における比較

表5は、人称代名詞以外の前接語における「ら」と「たち」の出現数を比較したものである。固有名詞では「ら」との共起が多くみられたが、それ以外の職業に関する語、親族に関する語、動物・無生物名詞では「たち」の使用が多い傾向がみられた。

表5 人称代名詞以外の前接語の出現数

	ら	たち
固有名詞 (人名)	163	64
職業に関する語	14	111
親族に関する語	10	133
動物名詞	1	63
無生物名詞	0	23

4-4-1 固有名詞・職業に関する語・親族に関する語

次の(7)、(8)は固有名詞と共起する用例である。

- (7) もともと三千しか直属の兵を持たなかった家康は、こうして五万八千の兵を持つことになった。先鋒を担うことになった福島正則、黒田長政らは、ただちに西へ向かった。 (出版・書籍, PB12_00053, 25730)

- (8) 須山さんたちはまず、その清算業務を引き受けるところから始めた。そして、もっと売り上げを伸ばすためのしくみづくりに取り組んだ。

(出版・書籍, PB56_00058, 23920)

固有名詞では、(7)のように「ら」はフルネームと多く共起し、「たち」は(8)のように「さん」などの敬称がつくものとの共起がみられた。これらについて、「ら」と「たち」の出現数を比較したものが表6である。敬称に関しては「たち」において「さん」のほかに「くん」「ちゃん」など親しみのある敬称との共起がみられたが、「ら」では「氏」「殿」などの畏まった表現と共起していることもわかった。

³ 今回の用例は目上による発話において比較を行ったため、目上の場合は「ら」「たち」の選択が可能であるといえるが、目下から目上への発話の場合は選択の余地が制限されることが考えられる。

職業に関する語では、(9)のように刑事や執
政官、法学者といった行政・司法や学術など堅さ
やフォーマルな印象のある職業と「ら」が共起し
やすい傾向がみられる。「たち」では(10)のよ
うな役者や音楽家、画家などの芸能・芸術に関す
る職業と共起する傾向がみられた。これらの職業
は大衆的で馴染み深いものであることから、やは
り「たち」における親しみの特性が関係している
と考えられる。

表6 固有名詞における出現数比

	ら	たち
フルネーム	55	4
敬称	12	10
さん	4	8
くん	0	1
ちゃん	0	1
氏	7	0
殿	1	0
固有名詞合計	163	64

- (9) 朝駆けする予定を急きょ取りやめ、刑事らに電話でその旨を連絡する。これ
もまたひと仕事であった。(出版・書籍, PB13_00095, 27280)
- (10) 私は一切、酒を飲まないが、芝居をやっていると、役者たちと居酒屋に行
く機会が多い。(図書館・書籍, LBo9_00219, 11120)
- (7) や (9) のような「ら」におけるフォーマルな表現は、(11) のように人称代名
詞の用例でもみられる。(11) はインタビュー時の発話だが、「見せたい」という願望
を引用的に示す文で「ら」が選択され、話者の主張をやや控えめにしている印象を受け
る。
- (11) 大川◆ ワイドショーは固定の視聴者が多いので、僕らとしても常に新し
いアイディアを見せたい、というところがありますから。プランを考える先
生方も、作業されるご主人も、その点では大変なんですよ。
(出版・書籍, PB4n_00217, 42560)

したがって、この場合の「ら」は畏まりや謙譲の意を示すものと位置づけることがで
きる⁴。論文などで「(研究者名)ら」と表記されているのを目にすることがあるが、こ
れは「ら」が畏まりの意を示すことから「たち」ではなく「ら」が選択されているもの
と思われる。

親族に関する語では、「たち」において「お母さん」「お兄ちゃん」など呼びかけに用
いられる「親族名称＋敬称」の形がみられたが、「ら」ではみられず、「父母」「兄」と
いった続柄に関する語のみだった。また、「こども」という語は「たち」との共起は 51
件と多かったが、「ら」は 1 件のみだった。(12) では事実状況を述べている報告的な文
において「ら」が使用されており、客観性が読みとれる。一方で、(13) では登場人物

⁴ 「ら」における畏まりや謙譲を示す機能については、複数にすることによって指示対象の
特定をさけて曖昧さを生み、謙譲を表しているとする見解もある。

同士の親しい関係性や親愛が表れている。

- (12) 千九百九十年秋に、横浜へ転居した。引っ越しは兄らが手伝ってくれた。
母や姉、兄らとの関係はいまでも良好で、毎日のように電話で連絡を取りあ
 っている。
 (図書館・書籍, LBS3_00140, 75780)

- (13) 寝ていたローラや従姉たちも、いつのまにか目をさまして、伯父さんと伯
 母さんがかわるがわる話すのを聞いています。
 (出版・書籍, PB28_00055, 55980)

4-4-2 動物名詞・無生物名詞

動物名詞・無生物名詞について、『日本語文法事典』⁵では角田（1991：39）におけ
 る Silverstein（1976）にもとづく名詞句の階層（図 1）を用いて「複数またはグルー
 プを表す接尾辞「-達」は、1 人称から人間名詞までは自然である」とした一方で、動
 物名詞と無生物名詞は不自然で言えないとし、「夜空に輝く星達」というような表現を
 見たことがあるが、やはり不自然である」と述べている。しかし、近年このような動物
 名詞・無生物名詞に「たち」が接続する表現がよくみられ、今回の調査でもこのような
 用例が複数確認できた。

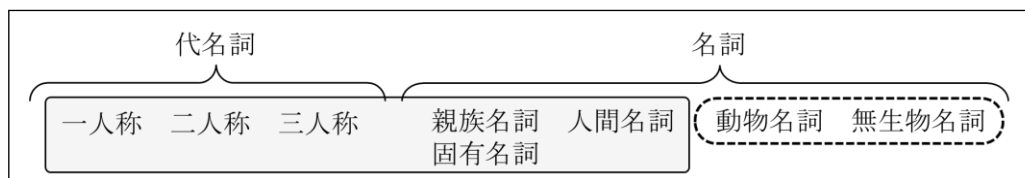


図 1 Silverstein（1976）にもとづく名詞句の階層（角田 1991：39）

- (14) 気温が最も上昇する 7～8 月になると、巣箱内の温度も高くなるため、蜂た
 ちは様々な行動で室温調節をはかる。
 (図書館・書籍, LBI4_00032, 18590)

- (15) 気温が最も上昇する 7～8 月になると、巣箱内の温度も高くなるため、蜂は
 様々な行動で室温調節をはかる。
 (作例)

(14) は動物名詞による用例で、(15) は (14) を「たち」がないものに置き換えた
 文である。2 つの用例を比較すると、(15) は (14) の「たち」がある文に比べて指示
 対象である生物が無機質に感じられる。反対に、(14) は「たち」があることによって

⁵ 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館，pp.649-650

生物がより生命的に感じられる。これについて、無生物名詞の「たち」による複数化を個別化の用法という観点から論じた村端（2019）は、以下のように述べている。

すなわち、生物である動物や人間に「-たち」を付加する場合に、個別の物を際立たせたい時に複数形にし、一般的にそのカテゴリーに属するものとして言及する時には「-たち」がつけられていないのである。（村端 2019 : 25）

つまり、「たち」がある場合には指示対象となる個々の生物に焦点化されるため、指示対象である生物が生命的に感じられるのである。反対に、「たち」がない場合には指示対象となったものはカテゴリーに属するものの単なる総称としてみなされるため、無機質な印象を受けるのだと考えられる。次の（16）～（19）は無生物名詞による用例である。

（16）コップ一杯の水を飲むと、腸から水が吸収されて、からだの細胞に達し、
細胞たちは満足する。（出版・書籍，PB24_00193，22940）

（17）コップ一杯の水を飲むと、腸から水が吸収されて、からだの細胞に達し、
細胞は満足する。（作例）

（18）予定より早く桜祭りも始まっていて期待充分。「これが見たかったの！」という桜たちに会いました。（特定目的・ブログ，OY15_23933，5940）

（19）予定より早く桜祭りも始まっていて期待充分。「これが見たかったの！」という桜に会いました。（作例）

（16）と（17）を比べると、「たち」がある（16）は静的である無生物が動的に感じられるが、これはさきほどの村端（2019）の指摘との関連性が考えられる。また、これらの用例では、それぞれ「満足する」「会いました」といった人間的な表現が用いられている。したがって、無生物名詞においては「たち」の個別化の特性が動的な印象を生むことによって、「無生物名詞+たち」が擬人化の用法として用いられているのだと考える⁶。さらに、「たち」を用いると複数であることが明確になるため、（18）のような場合は多数であることが強調され、豊かさを表す作用も生まれていると考えられる。一方で、動物・無生物名詞において、単なる複数を表す場合に「ら」が用いられることは少ないが、これは動物・無生物が話者である人間とは異なる種別であることから、

⁶ （16）において「満足する」という表現が用いられていることから、今回は擬人的であると判断したが、理系分野の内容においては単数と複数をはっきり明記する傾向があるため、単数と区別するための単なる複数形として「たち」が用いられているとも考えられる。

「ら」を用いて隔たりを大きくし、排他的な印象を生むことを避けるためだと思われる。

4-5 レジスター別にみた比較

図 2 は、「ら」と「たち」のレジスター別出現率を表したものであるが、特定目的の法律や白書、国会議事録などで「ら」の使用傾向が高い。これらは公的文書などフォーマルさが必要な文が多く使用されると考えられるレジスターであることから、やはり「ら」が畏まった表現として使用されている傾向があるといえるだろう。また、出版・新聞においても「ら」の優位性がみられることから、新聞記事における事実伝達の中立性や客観性が影響し、「ら」の使用を好む傾向にあるのだと考えられる。一方、特定目的・広報紙においては「たち」の使用が高い傾向が読みとれる。これは、広報紙が各組織団体等の活動を周知させることを目的としていることから、親しみやすさが重視されるためであると思われる。

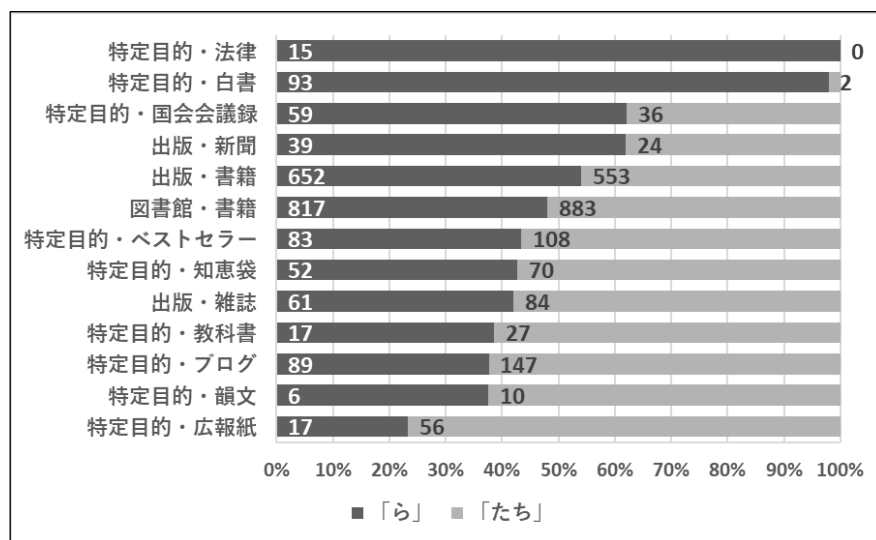


図 2 レジスター別出現率

5. 考察

「ら」では、軽視や蔑視、排他性のある表現や客観性、畏まりや謙譲の意を示すことがわかった。一方、「たち」は同質性や親しみの表現に加え、配慮や思いやりの意を示す性質がみられた。これらを踏まえて、「ら」と「たち」の使い分けについて考察する。

5-1 「ら」と「たち」の使い分け

「ら」と「たち」の使い分けにおいては、話者と指示対象との心的距離が作用しているのではないかと考える。話者と指示対象との関係性について、図 3 のように示した。

まず、話者を中心として「たち」の領域が存在し、「たち」の周辺領域として「ら」の領域が存在していると考えられる。このように考えると、「たち」は話者と指示対象との

距離関係が近く、反対に「ら」は両者の距離関係が遠いといえる。ゆえに、人称代名詞において「たち」には親しみや同質性、「ら」には客観性が生まれるのだと考える。

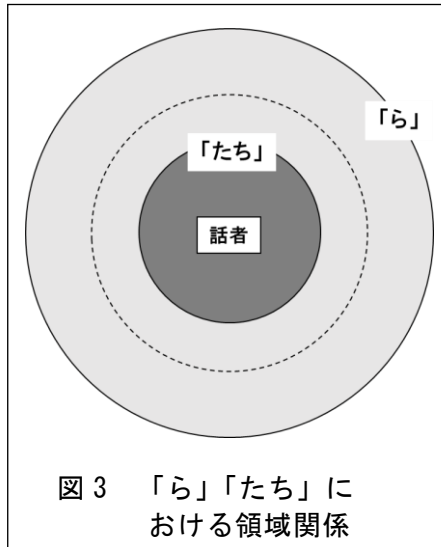


図3 「ら」「たち」における領域関係

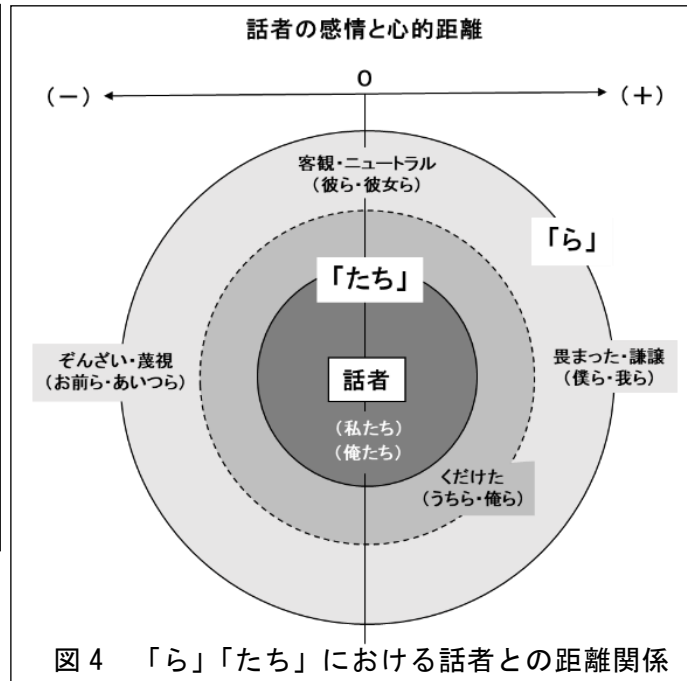


図4 「ら」「たち」における話者との距離関係

また、「ら」については指示対象に対する話者の感情との関連が考えられる。それらを詳しくまとめたものが図4である。感情の値が0の状態である中心には、客観性がある。その中心線より右側に位置すると、指示対象に対する話者の感情がプラスであることを示し、中心線より左側に位置する場合は指示対象に対する話者の感情がマイナスであることを示している。指示対象に対する話者の感情がプラスである場合、話者が指示対象に対して距離を取ることで、謙譲の意や配慮を示そうとするネガティブプライトネスに作用すると考えられる。一方で、指示対象に対する話者の感情がマイナスである場合、同様に距離を取り、自分の領域から排除しようとするはたらきが起こり、「ら」における軽視や蔑視の表現が生まれるのだと考えられる。さらに、「うちら」「俺ら」などくだけた表現として「ら」が用いられる場合もあるが、これは「ら」の領域の中でも点線部分で示した「たち」の領域に近い部分に存在しているものと思われる。つまり、「ら」の軽視の意に「たち」の親しみ表現が付与され、親しい関係性でのくだけた表現として使用されているのだと考えられる。

このように、「ら」と「たち」の使い分けについて話者と指示対象との距離関係をもとに考えると、鄭(2001)での聞き手包含・非包含との関連性についても説明がつく。鄭(2001)では、自称代名詞の複数形において、(20)のように話し手と共に聞き手が指示対象として含まれている場合を「聞き手包含」、(21)のように指示対象に聞き手が含まれていない場合を「聞き手非包含」と定義した。

(20) 「だけど、夫婦でしょ、わたしたち」 (鄭 2001 : 64)

(21) 「あなた一人でぼくらを説得できますか」 (鄭 2001 : 64)

そのうえで、「ら」と「たち」を比較し、「関東では、「聞き手包含」の発話より「聞き手非包含」の発話のほうで「ら」が使われやすい」ことを明らかにした。これを話者と指示対象との距離関係として考えると、「ら」は話者と指示対象の距離が離れていることから、話し手とともに聞き手が含まれない「聞き手非包含」の形で使用される傾向にあるといえる。

5-2 「彼たち」はなぜ言えないのか

三人称代名詞「彼」「彼女」において、前節で挙げた図 4 をもとに考えると、三人称であることから客観性が高いため、「彼ら」「彼女ら」といったように「ら」が使用できるものと考えられる。しかし、表 4 で示したように「かのじょ」においては「たち」との共起が優勢であり、「かれ」においては「たち」との共起はみられない。これについて、森田（1980）では代名詞「彼」について次のように述べている。

「彼」も、「か」つまり“かなたのもの”である。「これ／それ／あれ」の「あれ」に相当する古い形が「かれ」である。この語も、話し手中心にとらえられた指示語である。
(森田 1980 : 10-11)

以上から、人称代名詞「彼」は本来指示代名詞であり、指示代名詞から転用されたものであることがわかる。また、森田（1980 : 268）では「ら」について、「指示代名詞に付けて、事物に対しても用いられる点が「たち」と異なる」と述べており、言い換えれば「たち」は指示代名詞にはつかないのだと解釈できる。したがって、指示代名詞から転用された「彼」には「たち」を用いにくく、「彼ら」が一般的に使用される傾向にあるのだと考えられる⁷。

一方、「彼女」は人以外のものを指すことはないため、「ら」に加えて「たち」も使用することができるのだといえる。また、「彼ら」は指示対象が男性のみの場合に限らず、男女混合の場合にも用いられるが、「彼女」の複数形の場合は指示対象が女性のみに限られる。このことから、「彼女」においては同質性のある「たち」のほうが好まれ、「彼女ら」より「彼女たち」が優勢な傾向にあるのだと考えられる。

⁷ 松本匡史氏（埼玉大学大学院生）の直話によると、日本語学習者に提示する際に、「彼女たち」と対応する語として「彼たち」を用いることがあるそうだが、これは「彼女たち」が女性のための複数形を表すのに対して「彼ら」が男女混合の場面でも使用されるためだと考えられる。「彼たち」とした場合、男性のための複数形であるように感じられる。したがって、対応する語として一部で「彼たち」が用いられているのだと推察する。一般的に日本語母語話者は用いにくい、今後の動向に注目したい。

6. 日本語学習者への指導に関する提案

表 7 は日本語能力試験（旧試験）における人称代名詞の出題範囲をレベル別にまとめたものである。3・4 級の初級レベルにおいて使用される人称代名詞は、「かれ」を除けば「たち」が複数形として主に使用されるも

表 7 日本語能力試験（旧試験）における
レベル別人称代名詞出題範囲

4 級	あなた	じぶん	わたくし	わたし
3 級	かのじょ	かれ	きみ	ぼく
2 級	おまえ			
1 級	おれ	やつ	われ	

（参照：『日本語能力試験 出題基準[改訂版]』）

のであるため、初級レベルでは複数形に「たち」を使用するように指導し、「彼」については例外として「ら」を用いるように指導する方法で問題ないとする。

一方で、2 級では「ら」と「たち」の使用にあまり差がなかった「おまえ」が出題語彙として挙げられ、1 級では「やつ」「われ」といった主に「ら」と共起するぞんざいな表現の語彙が扱われており、複数を表す場合に「たち」だけでは補いきれないという問題が浮上する。したがって、複数を表す「～ら」が 2 級出題語彙である点を考慮し、中級レベルでは複数を表す「ら」が軽蔑などのマイナスの意で使用される点について理解を促すのが良いと考える。ただし、「ら」のマイナスの用法は場合によっては失礼にあたり、産出があまり望ましくないため、あくまで理解にとどめるべきだと考える。

上級レベルになると、文書などフォーマルな書き言葉を扱う機会やアカデミックな表現が求められる場面が増えることが予想される。前節で示したように、フォーマルさや畏まらが必要とされる場面で「ら」を用いる傾向があり、そのような場面で「たち」を用いると表現が稚拙に感じられてしまう可能性もある。上級レベルに対しては、「ら」を用いることによって、複数を表すとともにフォーマルさも表現することができるという「ら」のプラス的な用法について指導することを提案する。

7. まとめと今後の課題

今回の考察で指摘した心的距離との関連性については、使用者が実際にそのような意識のもとで使い分けを行っているのか、使用者意識に関する質問紙調査を実施する必要があるだろう⁸。また、本研究は BCCWJ による調査であったため、地域差や世代差、性差における違いは明らかにならなかった。加えて、日本語学習者への提示には向かない用例もあったことから、会話コーパス等による調査を検討するとともに、話し言葉と書き言葉での使い分けについても考察したい。本稿では「彼たち」を用いにくい要因についても触れたが、通時的な視点による考察であったため、共時的な観点からも考察を深める必要がある。さらに、「ら」が謙譲の意を示す点に関して、同様に複数形接尾辞である「ども」も謙譲の意を示すとされていることから、これらの違いについても明ら

⁸ 心的距離の考察において、感情や人称における距離の違いを区別せずに扱っていたため、これについても今後の課題とする。

かにしたい。これまで敬意の度合いや待遇差などによって区分されることが多かった 4 つの複数形接尾辞は、本稿で示したように、単に敬意の度合いだけで補いきれるのか、今回調査対象としなかった「がた」「ども」についての考察も今後の課題とする。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 植村則子（1994）「栄花物語の複数接尾語「たち」「ども」について」『奈良教育大学国文学研究と教育』16, pp.38-46, 奈良教育大学国文学会
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会編（2004）『日本語能力試験 出題基準[改訂版]』凡人社
- 佐竹秀雄（1999）「複数を示す「ら」」『日本語学』18（14）, pp.19-22, 明治書院
- 鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
- 鄭惠先（2001）「複数を表す「たち」と「ら」の使用における選択条件—シナリオの分析結果を中心として—」『社会言語科学』4（1）, pp.58-67, 社会言語科学会
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2002）『日本国語大辞典』第二版, 小学館
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館
- 文化庁・編（1979）『ことばシリーズ 11 言葉に関する問答集 5』大蔵省印刷局
- 三輪正（2005）『一人称二人称と対話』人文書院
- 村端佳子（2019）「日本語の複数標識に見られる英語の影響—「たち」が表象する個別化の観点から—」『宮崎国際大学教育学部紀要 教育科論集』6, pp.15-27, 宮崎国際大学教育学部
- 森田良行（1980）『基礎日本語 2—意味と使い方』角川書店
- 손영석（2013）「복수를 나타내는 접미사 「たち」와 「ら」의 선택요인 —『대담방송 멀티미디어 코퍼스』를 자료로—」『언어정보』17, pp.47-72, 고려대학교 언어정보연구소
- 박민영（2014）「현대 일본어의 복수형 접미사 「～たち」와 「～ら」의 비교 고찰」『日語日文學研究』90-01, pp.43-58, 韓國日語日文學會

使用データ

コーパス検索アプリケーション「中納言」ver.2.4.5 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（<https://chunagon.ninjal.ac.jp>）2021年4月12日検索

（埼玉大学教養学部生）